

コロナ禍から開催した 閉館後イベント等について

新江ノ島水族館 館長 崎山 直夫
 企画チーム 岩崎 菜奈
 企画チーム 野上 まみ
 マーケティングチーム 山崎 祐一郎

1. はじめに

新江ノ島水族館は目の前に広がる相模湾、東に江の島、西に富士山を望む美しい景観に恵まれた水族館です。1954年に開館した当時は近代的水族館第1号と言われ、多くのお客様を迎え入れるとともに、鯨類の繁殖やクラゲ飼育展示に注力するなど業界を牽引してきました。老朽化が進み2004年には全面リニューアルし、今年の4月で19年が経ちます。

当館では、2004年のリニューアルオープン以来、展示空間や交通の便が良い立地を生かして、団体や募集による夜のお泊り水族館、貸切イベント、企業等の記念イベント、結婚披露宴、ナイトワンダーアクアリウム、ヒカリノエノスイなど通常の営業時間外、あるいは時間を延長してのイベントを実施してきました。コロナ禍により、一時はissippiのイベントを中止せざるを得ない状況となりましたが、感染者が増減する中でお客様のニーズを検討し、感染予防対策を施した上でいくつかのイベントを実施してきました。そのいくつかを紹介します。



図1. お泊りナイトツアー



図2. ヒカリノエノスイ

2. 当館での企画イベントの立案

新江ノ島水族館には生物を扱う展示飼育スタッフの他に、館内の企画イベント立案、実施を担う専門のスタッフが配置されています。そういった企画スタッフはもともと生物飼育を勉強してきた人材ではありません。現在、当館では館内外の企画イベントの立案については、企画スタッフを中心に立案を行って、生物に係る部分に関して展示飼育スタッフが詳細を詰める形で運営しています。そのため展示飼育スタッフとは違った視点での企画イベントが発案されます。時には実施内容に関して展示飼育スタッフと摩擦が起きることもありますが、一方で展示飼育スタッフでは考えつかない企画を立案してくれます。

3. 館内のコロナ対策

新江ノ島水族館では、国・自治体の方針および日本博物館協会ガイドラインに沿った感染症対策を施し、お客様が安心・安全な施設としてご来場できるよう運営しました。具体的には、ショーの運営方法の調整、収容人数調整、入場時の検温、マスク着用のお願、消毒液の設置、換気、定期的消毒、感染防止対策取組書の掲示、神奈川県 LINE コロナお知らせシステムの導入等の感染防止対策を、感染状況やお客様の空気感を意識しつつ運営しています。今回紹介する各企画イベントは、通常営業時よりもさらに安心してご参加いただける状況下で実施されています。



図3. コロナ休館後再開



図4. 再開当初のイルカショー

4. おひとりさま水族館

立案したスタッフ自身が、各地の水族館に行き、展示を見た際、家族連れや団体客などに影響を受けてしまうことがありました。そういった経験をもとに一人でゆっくりじっくりと水槽を楽しんでもらうという企画を立案しました。私語を慎んでいただき、通常の収容人数の1/10以下に絞った定員としました。参加者は水族館や生き物が好きな方が多いため、バック

ヤードの公開、バックヤードツアー、当館で人気の展示となるクラゲに特化した内容も企画しました。水槽前での生演奏等、開催毎に、より魅力的な新しいコンテンツを開発、提供し、リピーターが多いイベントとなっています。



図5. キービジュアル



図6. おひとりさま水族館 館内の様子

本イベントは会話がなく、自然とソーシャルディスタンスも保てることから、コロナ禍でも安心安全に楽しめるイベントとなりました。水族館を一人で存分に楽しみたい方の他、写真撮影を楽しむ方や、コロナ禍で人の多い場所へ行くことを控えていた方にも参加いただくことができました。コロナ感染者数が減ると本イベントの応募者数も減る、という相関があるようですが、静かにゆっくりと夜の水族館を楽しむおひとりさま水族館は、コロナが収束後も、新たなアイデアも加えつつ、定期的で開催していきたいと考えています。

これまでに19回実施し、2,543名が参加しました（2020年9月～2022年11月）。

お客様の声（抜粋）：

- ・ 普段は小さい子たちがたくさんいて、なかなか前の方で見る事ができないが、今日は思う存分堪能することができてよかったです。
- ・ 一人であることを気にせず、自分のペースでゆっくりと水族館を楽しむことができた。
- ・ 静かな環境で、いつもと違う「えのすい」が楽しめる。集中してリラックスできる。決して矛盾ではありません。
- ・ 日常の忙しさを忘れて、のんびりとした空間が、最高の癒やしです。
- ・ 1人でも浮かずに楽しめた。静かにゆっくり水槽を見て回れた。昼間は人気で見られない水槽もあったので夜にゆっくり見れてよかった。バックヤードツアーも勉強になり、こういった管理をしているのか知れてとても良かった。
- ・ 土日祝日だと混みあっているけれど、人数も限定されていて大人のみの参加なので静かにゆっくり観て回れた。いつも人気のクラゲのエリアも人が少ないのでじっくり時間をかけて観察することができて癒された。相模湾大水槽前に椅子を置いてくれるので、座って魚を観ることができるのもオススメ。

5. DarkAquarium - ダークアクアリウム -

夜、魚たちは何をして過ごしているのだろうか。静けさに包まれた館内を歩くと、私たちの想像をおおいに刺激してくれる空間が、そこにある。「夜の生き物たちの様々な姿を想像しながら、感性の刺激を受けて欲しい」、そのような気持ちから立案されました。おひとりさま水族館はおおむね通常照明ですが、本企画では館内の照明を落とし、お客様自ら持つランタンの灯りだけを頼りに夜の生物観察を行います。また、照明を落とすということで、ランニングコストの削減、省エネも意図して立案されています。

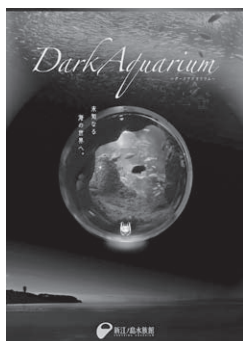


図7. キービジュアル



図8. 使用しているランタン

通常の営業延長ではなく、照明を落としお客様自身がランタンを手に館内を回るというこれまでにない企画でしたが、参加者数を見ると共感がいただけたように感じます。また、本イベント実施にあたり改めてスタッフで館内を回ったところ、水槽内にわずかに光る発光生物をみつけるという新たな発見につながりました。実際に開催してみて、お客様に立案した意図がうまく反映されないという反省があったことから、イベント実施前に開催趣旨やどのように見学していただくかをレクチャーすることにしました。以降は、時間を持て余すようなこともなく、真っ暗な夜の水族館を灯一つで楽しんでいただけるようになりました。

これまでに公募、団体含めて35回実施し、4,700名が参加しました（2020年12月～2022年11月）。

お客様の声（抜粋）：

- ・ 夜の海がまるで宇宙の闇のように見え、海がこんなにも暗い表情を持っているとは知らず、また、生き物たちの存在を灯で照らし出すまで認識できない我々の目の頼りなさを知った。普通の水族館の深海エリアでは知ることができないことまで知れてとても良かった。
- ・ 昼と夜の生き物たちの違いを実際に目で見て欲しい。すごく良かったです。
- ・ 昼間の水族館とはまるで違うようすでした。ランタンを水槽の縁に置き、暫くようすを見ると、魚のほうから少しずつ近づいてきてくれたりもしました。相模湾大水槽はずっと見てられます。
- ・ 昼間とは違った生態が見れてとても楽しかったです。また、人数が少なく設定されてい

るのでお気に入りの水槽をずっと見ていると周りに迷惑をかけないのが良いと思います。

- ・ 感染対策もしっかりしており、ゆっくりと生態観察ができ普段の水族館とはひと味違う楽しみ方をできました。
- ・ ヒカリキンメダイの光がとてもキレイで、暗い中輝いて見えました。昼間とは違う雰囲気、相模湾大水槽、神秘的でした。

6. Dolly Night Aquarium

これまで当館の客層ではなかった、ぬいぐるみ、ドール愛好者を新しく獲得することを目的に、写真撮影に特化したイベントを企画しました。写真映える水族館という点の訴求にもつながります。閉館後に人目を気にせず、撮影を楽しめる空間を提供します。館内各所に専用のフォトスポットを設置し、撮影補助グッズを貸し出します。イベントハッシュタグを設定してのSNS投稿を促進しました。



図9. キービジュアル



図10. Dolly Night Aquarium 館内の様子

新たな客層を獲得できた企画となりました。事前に少人数によるモニター撮影会を実施し、参加人数、料金、撮影環境、持ち込み機材、開催時間等に関するアンケートを取りました。そこで、この企画に期待感をもっていること、少なめの参加人数設定が望ましいこと、撮影のための貸し出し機材が必要なことなどがあがり、これらの意見をもとに一定のルールを定めた上で本開催をしました。引き続き様々なご要望があるため、回数を重ねる中で改善を図り進化させていきたいと思っています。

これまでにモニター回をあわせて8回実施し、227名が参加しました（2021年6月～2022年11月）。

お客様の声（抜粋）：

- ・ 普段からドールの写真を撮っていますが、やはり周りが気になりますし、外でゆっくり撮ることはそうそうできません。それがこのイベントはドールの写真を撮るためのイベントで、もちろん他の参加者様のことは気にしなければなりませんが、みんな目的が一緒

- で気兼ねなく 自分のうちのドールたちの写真を撮れるのが非常に魅力的と思いました。
- ・ 楽しく撮影できました。他の方のドールやぬいぐるみも見れて可愛かったです。
 - ・ きっかけはツイッターで告知を見かけたことです。水族館という素敵な場所で、他の方の目を気にせず撮影できるというのが魅力的でした。
 - ・ ドールを自由に撮影させてくれるイベントは少なく貴重な機会であり助かります。
 - ・ 元々水族館が好きで巡っていて、悪いと思いながらもこっそりドールを撮影していました。
 - ・ 水族館でドール撮影が可能で、しかも 40cm クラスのドールでも撮影出来たから（大抵は小さいぬいぐるみのみなので…）。

7. 今後に向けて

ここで述べるまでもなく、コロナ禍により、水族館、博物館などの運営方法は大きく変化しています。今後、脱コロナになったとしても、コロナ前と同じ運用に戻るといよりも、新たな形に進化していくものと考えられます。

今回紹介した各企画イベントは、生き物を扱う展示飼育スタッフ以外の発想がかなり生かされてできたものです。水族館マニアであるスタッフ自身が、こういった内容ならば知的好奇心が刺激されるには、心地よい時間を過ごしてもらえるのでは、と企画したもので、当館の新たな価値や客層の創成につながるものとなりました。また、ストレスを抱える方々にささやかながら癒しの場を提供できたようで、その点もうれしく思っています。今後は多様な考え方、知識、技術、能力を持ったスタッフを生かした運営体制を構築し、多様なニーズに応えていけるようにしていきたいと思えます。

現在、当館では水族館単独の集客、企画だけでなく、地域の活性化にも協力すべく、地域イベントへの協働や、当館がリードして共に取り組む企画イベントの立案、運営も行っています。こういった取り組みは改正博物館法でも謳われている内容となっています。生物多様性やSDGs への取り組みとともに、地域に根差した、拠点となる施設としての役割、多様化する博物館の役割を果たしていけるよう努力したいと考えています。



図 11, 12. 地域のイルミネーションとつながるようになりました。